

令和7年度 学校評価

■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない ■ わからない

(1) 主体的に考え行動する力を育む教育の推進		考察
1 豊かな心と健やかな体を育む教育の推進 学校は、豊かな心と健やかな体を育む教育の充実に努めていると思いますか。 (感動・感謝、郷土愛、いのちを大切にすること、子どもの体力向上、基本的な生活習慣など)	2 自ら学びに向かう力を育む教育の推進 学校は、子どもが自分で考え、自分から取り組む授業づくりに取り組んでいると思いますか。	○「心かがやけ月間」や「学校保健委員会」をはじめ、豊かな心と健やかな体を育む教育の実践を学校全体として行ってきたことにより、保護者と児童の「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」の割合が昨年度よりさらに減少した。しかし、保護者の「わからない」の割合が高いことを真摯に受けとめ、学校からの積極的な情報発信、一人一人を大切に指導をさらに推進していく。 ○自分で考え、自分から取り組む授業づくりに関して、教職員の「そう思う」割合が高い一方で、児童の「どちらかといえば、そう思わない」「わからない」の割合が高いことを踏まえ、児童が自ら学びたいと思う課題の設定や学びを深めるために必要な対話や反応、表現するためのスキルと自信を持って学習に向かう姿勢を身につけさせる必要がある。また、保護者の「わからない」の割合が昨年度より増えていることから、校内研究と連動させて教職員がいつでも授業を公開できる力を高め、授業について情報発信していく。 ○社会をよりよくするために考え、行動できる児童の育成に関して、昨年度に比べて児童の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」の割合が増えた。校内での取組に留まらず授業で取り組んできた児童の生活や経験が生かせるような課題設定や活動を、今後は家庭や地域に広げていく取組が必要である。
(1) 主体的に考え行動する力を育む教育の推進		考察
3 社会の形成や持続的発展に主体的に貢献する力を育む教育の推進 学校は、学校生活や地域社会をよりよくするために考えたり、行動したりすることの育成に、取り組んでいると思いますか。(児童会・生徒会活動、学校のきまり見直し、地域のよさを伝えたり課題解決したりする取組、ナイスライ(中学校)など)	学校は、子どもが、対話などを通して、他の人の考えや意見を自分の学びに生かすような授業ができていると思いますか。	○個別最適な学びに関しては、昨年度より教職員も児童・保護者も「どちらかといえば、そう思わない」の割合が減少した。自分で課題を設定したり学びの方法を検討したりする経験を積み重ね、さらに家庭学習と日々の授業を連動させることで、「主体的な学び」から「深い学び」は自分で構築することができると意識を転換させていくための取組を継続する。 ○対話のある授業については、校内研究で取り組んでいることもあり、児童の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」の割合が昨年度より増えた。考えを伝え合う活動を取り入れた授業改善によって児童の困り感も減少してきている。 ○支援の充実に関しては、教職員と保護者の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した割合の差は大きい。学校の取組が十分に伝わっていないという課題が考えられる。支援体制の在り方について積極的な情報発信が必要である。 ○インクルーシブ教育に関しては、児童の「そう思う」の割合は高くなったが、依然として児童・保護者ともに「わからない」の割合も高い。多様な教育的ニーズに対応した支援の充実と同様に、特別支援教育コーディネーターを中心に保護者・児童への啓発の在り方について見直ししていく。
(2) こども一人一人を尊重した教育の推進		考察
4 5 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実 学校は、子どもが、学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学ぶ授業づくりを行っていると思いますか。	学校は、子どもが、対話などを通して、他の人の考えや意見を自分の学びに生かすような授業ができていると思いますか。	○個別最適な学びに関しては、昨年度より教職員も児童・保護者も「どちらかといえば、そう思わない」の割合が減少した。自分で課題を設定したり学びの方法を検討したりする経験を積み重ね、さらに家庭学習と日々の授業を連動させることで、「主体的な学び」から「深い学び」は自分で構築することができると意識を転換させていくための取組を継続する。 ○対話のある授業については、校内研究で取り組んでいることもあり、児童の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」の割合が昨年度より増えた。考えを伝え合う活動を取り入れた授業改善によって児童の困り感も減少してきている。 ○支援の充実に関しては、教職員と保護者の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した割合の差は大きい。学校の取組が十分に伝わっていないという課題が考えられる。支援体制の在り方について積極的な情報発信が必要である。 ○インクルーシブ教育に関しては、児童の「そう思う」の割合は高くなったが、依然として児童・保護者ともに「わからない」の割合も高い。多様な教育的ニーズに対応した支援の充実と同様に、特別支援教育コーディネーターを中心に保護者・児童への啓発の在り方について見直ししていく。
(2) こども一人一人を尊重した教育の推進		考察
6 特別支援教育をはじめとする多様な教育的ニーズに対応した支援の充実 学校には、子どもが助けを必要とするときに、先生や友達から支えてもらえる温かな雰囲気があると思いますか。	7 インクルーシブ教育の推進 学校では、子どもがそれぞれの違いを認め、お互いを尊重し合って共に学び合っていると思いますか。	○個別最適な学びに関しては、昨年度より教職員も児童・保護者も「どちらかといえば、そう思わない」の割合が減少した。自分で課題を設定したり学びの方法を検討したりする経験を積み重ね、さらに家庭学習と日々の授業を連動させることで、「主体的な学び」から「深い学び」は自分で構築することができると意識を転換させていくための取組を継続する。 ○対話のある授業については、校内研究で取り組んでいることもあり、児童の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」の割合が昨年度より増えた。考えを伝え合う活動を取り入れた授業改善によって児童の困り感も減少してきている。 ○支援の充実に関しては、教職員と保護者の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した割合の差は大きい。学校の取組が十分に伝わっていないという課題が考えられる。支援体制の在り方について積極的な情報発信が必要である。 ○インクルーシブ教育に関しては、児童の「そう思う」の割合は高くなったが、依然として児童・保護者ともに「わからない」の割合も高い。多様な教育的ニーズに対応した支援の充実と同様に、特別支援教育コーディネーターを中心に保護者・児童への啓発の在り方について見直ししていく。

(3) 最適な教育環境の整備		考察
8 安全・安心な園づくりの推進	9 地域や家庭と連携した教育環境の整備	<p>○安全と事故防止については、教職員の「そう思う」の割合が増えた。一方で保護者と児童の「そう思う」の割合が依然として「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」「わからない」と回答しており、「自分の命は自分で守る」という意識を高め、更なる事故防止と安全教育に努めたい。</p> <p>○家庭や地域との連携協力については、児童の「そう思う」の割合は増えたが、保護者と教職員は減少している。教職員が率先して家庭や地域を訪れ、校区を知ることを求められる。さらに保護者や地域人材の積極的活用を図るための行事の精選や時間設定の工夫を行う必要がある。</p>
<p>学校は、こどもの安全を守る環境の整備を進めるとともに、安全教育（生活・交通・防災など）に取り組んでいると思いますか。</p>	<p>学校は、地域や家庭の人と協力して、授業や行事などの教育活動を進めていると思いますか。</p>	

(4) こどものいのちと権利の擁護		考察
10 こどもの最善の利益を守る環境づくり		<p>○こどもの権利を守り、保護者が相談しやすい学校に関して、依然として教職員と児童・保護者の「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した割合の差は大きい。校内では人権教育を中心に子どもの権利を守るためにしっかり情報や実践を共有し取組を進めているが、児童一人一人が「自分が大切にされている」と思える取組につながっていなかったり、保護者との連携が安心感を味わえるものになっていなかったりしていたと考えられる。学校の実践を発信し、保護者への啓発の在り方を見直す必要がある。</p>
<p>学校は、こどもの意見を反映させ、こどもの権利を守るとともに、こどもや保護者が相談しやすい学校づくりに取り組んでいると思いますか。</p>		

独自項目		考察
基本的な生活習慣	国語力向上に向けた取組	<p>○早寝、早起き、朝ごはんの習慣について、保護者、児童は「そう思う」と感じている割合は多いが、教職員はとても少ない。特に、これらの習慣が身につけていない児童の様子を注視し、家庭と連携を図りながら意識づけをしていく必要がある。</p> <p>○読書や暗唱については「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」の割合が保護者、児童が7割とこの数年間変化が見られない。親子読書や読み聞かせなどの取組の継続とともに、読書や暗唱と学力との相関関係などその有効性について啓発していく必要がある。</p> <p>○昨年度同様、児童と教職員については、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した割合が約7割である。保護者については8割に満たない。半数の児童は「そう思う」と回答していることから、主体的に取り組んでいることがわかる。今後、さらに児童のがんばりを地域や家庭にも積極的に伝え、植木小の伝統である「三つの宝」について広く周知を図る必要がある。また、教職員自身も「三つの宝」を意識した指導の在り方を工夫し、児童とともに実践していく。</p>
<p>こどもは、早寝、早起き、朝ごはんの習慣が身についていると思いますか。</p>	<p>こどもは、読書や暗唱に意欲的に取り組んでいると思いますか。</p>	
規律ある学校生活		
<p>こどもは、三つの宝（うつくしくまわりを・えがおであいさつを・きちんとくつならべ）ができていますか。</p>		

来年度の具体的な取組について

- ・学校、学級での具体的な取組を学校だより、学級通信や学校ホームページなどで保護者、地域の方に向けてわかりやすくこまめに発信していく。
- ・「確かな学力向上」を目指し、学習の振り返り指導と協働的な学びのための指導に力を入れて授業実践、研究を深めてきた。来年度も継続、発展させながら、更なる児童の学力向上に努めたい。
- ・人権教育や道徳の授業、集会活動などを通して児童一人一人のよさを認め合える活動に取り組んでいることや学校の支援体制を積極的に発信し、開かれた学校として児童を中心とした保護者との連携、地域との連携の在り方を模索し、よりよい連携協力につながるよう力を入れていきたい。
- ・交通安全に関して登下校中だけでなく日常生活の中で児童が危険にさらされる状況が頻発したので、引き続き「自分の命とともに周りの人の命も守る」安全指導に取り組んでいく。保護者との連携を深めるために、学校の教育活動を学校ホームページで発信していることをさらに周知していく。
- ・本校の「三つの宝」推進については、自分たちの学校は自分たちの力でよりよいものにしていくという、これまで脈々と受け継がれてきた思いを大切にしながら、自分だけでなく学校のみならず、ひいては地域の人々のためにという相手意識を高めて、教職員が手本となるよう取組を進めていきたい。

小中学校関係者評価

- ・落ち着いている児童が多い。学校が全体的に落ち着いている。
- ・先生が丁寧に一生懸命授業している。先生が一人一人を見て回り、がんばりを褒めて、例えば漢字を使っていなければ漢字を使って書くように促しているのは良いことである。児童は先生の指導を素直に聞いており、全学年楽しく授業を受けている。主体的に授業に取り組んでいた。
- ・グループでの活動には個人差や理解力の差があるように感じた。代表がタブレットで発表していたが、時にはみんなで考え、発表するような活動も必要なのではないか。
- ・児童同士も先生と児童も関係性がとても良い。
- ・登下校も集団でまとまり、きちんと行動できている。最近は危険な行動をしている児童を見るのが減った。安全を考えた行動ができているように思う。